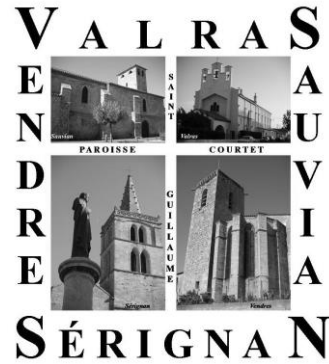


聖ギヨーム・クルテ教区

この小教区は、ソーピアン、セリニャン、バルラス、バンドルの4つの小教区が合併して2003年に誕生しました。その守護の聖人は、この教区に宣教の召命を与えました。

聖ギヨームとその同伴者の証しは、彼らの列聖を待たずに実りをもたらしています。19世紀後半、250年間の鎖国と激しい迫害の後に日本は開国し、新たに入国した宣教師たちは日本に信者がまだ生き残っていたことを発見したのです。この隠れキリシタンたちは、秘密裏に信仰に生き、「福音」の本質を次の世代に代々伝えていたのです。



*Une nouvelle paroisse
pour une nouvelle annonce
de la Bonne Nouvelle*

祈り

聖なる三位一体よ、あなたのすばらしい御業のゆえに、あなたを賛美します。聖ギヨーム・クルテとその同伴者たちは、あなたの恵みによって英雄的な生涯と死を遂げました。

彼らは、「最期まで」キリストに従うという決心をもって、日本の地に真理の福音を告げ、救いのメッセージをもたらそうと望み、迫害も、牢獄も、拷問も彼らの信仰を揺るがすことはありませんでした。また、彼らが救いたいと望んだ日本の人々の魂のために、最大の犠牲の前にもしりごみすることはありませんでした。

救い主のあとに従って勇ましく十字架を担い、神と人々の魂への愛のために、主と同じように血を流した、寛大な心の模範にならって、わたしたちは、あなたに祈ります。聖なる三位一体よ、私たちも福音からくみ取られたあなたの教会の教えに、いつも忠実であるようお助けください。

聖ギヨーム・クルテとその同伴者たちが心から愛し、仕えた、恵みと聖なるロザリオの聖母マリアよ。神の大いなる栄光とわたしたちの聖化のために、わたしたちが彼らの徳に倣って、天国への道を勇気をもって歩む恵みをお与えください。アーメン

1987年10月18日

モンペリエ司教 ルイ・ボッフエ

聖ギヨーム・クルテ

宣教者の召命

長崎で最初のキリシタン殉教があった時、ギヨーム・クルテは、まだベジエのイエズス会の学校の生徒でした。それは、子どもも含めた26人のキリシタンの男女が京都・大阪で捕えられ、長崎までの長い十字架の道行をしたあと西坂で十字架刑に処せられ、その信仰を証した出来事でした。

16世紀の半ばにフランシスコ・ザビエルをはじめとする宣教師たちが日本にもたらした「福音」は、人々に広く受け入れられ、迫害が始まった頃には、日本人司祭を含む二十万人近くの信者と教会組織が育っていました。1597年に殉教した26聖人のうちの3人は、日本人イエズス会士でした。この最初の殉教から30年後、ギヨームが同じ道をたどるための許可を長上に願い出たとき、日本の迫害の嵐はさらに激しさを増していました(1622年、火炙りの大処刑)。司祭は一人もいなくなり、生き残った信者たちは潜伏して彼らの信仰を守り、子どもや孫たちに信仰をひそかに伝えていました。



説教者のたどった道

ギヨームは、1589年にセリニャンで生まれ、ベジエの学校で初等教育を終えた後、トゥールーズで勉学を続けました。そこで、院長のセバスチャン・ミカエリス師をはじめとするドミニコ会の修道士たちと出会い、ドミニコ会に入会しました。アルビで1年の修練期を終えた後、1608年8月15日に18歳で誓願を宣立、24歳で司祭に叙階され、その信仰の深さと高い学識が知られるようになると、すぐ修練長の職務のようなさまざまな大きな責任を委ねられるようになりました。

彼は、サン・マクシマンとトゥールーズで数年間、哲学と神学を教え、1624年にはアビニョン大修道院の院長に選出されました。その2年後、修道会は彼に北ヨーロッパ地区の修道会改革という重大な使命を彼に託しました。この使命を終えた1628年、彼はドミニコ会長上に、子どもの頃から心に抱いていた召命を実現するための許可を願い出ました。1628年8月30日、パリで書いた手紙には、「わたしは、責め苦を受ける危険の中に身を置くために、子どもの時からずっと望んでいた所に行くことを願っています。」とあります。

世界をめぐる

Fr. Thomas de S. Dominga

その願いは、最終的に聞き入れられましたが、国と管区を変える必要がありました。当時、外国宣教を行う許可が与えられていたのは、スペインとポルトガルだけだったからです。彼は、1628年12月にマドリードの聖トマス修道院に到着し、そこでトマス・ド・サント・ドミンゴという修道名を名乗りました。メキシコ経由のマニラ行きに乗るまでには、そこでさらに5年の歳月を待たねばなりません。

マニラ大学では、マドリードと同様、神学を教えました。彼は、非常に優れた教授であり、聴罪師でした。自分には、厳しい苦行生活を課していましたが、他者に対しては、深い思いやりにあふれていました。マニラにやってくる船員たちによって、司祭がいなくなった日本のキリシタンたちの悲痛な叫びが届き、それを聞いたギヨームと5人の同伴者たち(そのうちの一人はスペイン司法の手を逃れてきた信徒)は、ジャンク船(中国式伝統的木造帆船)に乗って日本に出発することにしました。

一ヶ月間の非常に危険な航海の後、1636年7月10日の真夜中に、沖縄諸島の一つの島に上陸し、日本人の着物に着替えたということだけが、一年後マニラに帰った乗組員たちによって伝えられた音信のすべてです。地方の役人に逮捕されるまで、彼らは、潜伏していたキリシタンにどのくらいの期間、司牧することができたのでしょうか？ 数時間？ それとも一・二カ月？ 牢獄に閉じ込められていた一年間の間にどのような使徒職をしたのでしょうか？

最高の証し

上陸後14か月後にギヨームと5人の同伴者たちは、幕府の命によって沖縄から長崎に連行されました。そこで14日間、公衆の面前で残忍な刑罰を受けました。それは、群衆(この中に当時長崎に大勢いたキリシタンがまぎれていたことは確かです。)に対する見せしめとして、また、彼らに信仰を捨てさせるためでした。そのときの証言が、100以上残っています。それは、主にそれを目撃した船員たちが記したもので、残酷な拷問の詳細や殉教者の発した言葉などが、時々刻々報じられています。平和のことしか語らない、並はずれた被告人たちに憐みの気持ちを抱いた死刑執行の役人は、驚いて尋ねました。「ここに来たらひどい苦しみを受けて殺されることが分かっていたのに、いったい何故この日本にやってきたのですか？」ギヨームは、それを聞いて死刑執行人に答えました。「裁判官殿に申し上げます。私たちがこの国に来たのは、死ぬためでも拷問を受けるためでもありません。私たちの目的は、たとえ命を失うことになったとしても(…)キリストのために神の愛を伝えることだったのです。」1637年9月29日の夕方までに生き残っていたのは、2人だけでしたが、そのうちの一人がギヨームでした。代官たちは彼らを棄教させることができなかったのでその首をはねるように命令しました。そして他の殉教者と同じように遺物が残らないよう彼らを火葬し、骨と灰を海に捨てました。

列聖までの歩み

列聖調査は、殉教後1年後にはじまりましたが、行政上の困難に直面しました。しかし、セリニャンの村人たちやギヨームの家族は、殉教の知らせがあった時から彼の殉教に榮譽を付すことを望み、代々その願望を持ち続けてきました。ラコルデル(ドミニコ会司祭)も、この列聖調査を進めようと思いましたが、19世紀の終わりに、セリニャンの主任司祭であったタルニケ神父がそのあとを引き継ぎました。そして、もう一人のセリニャンの主任司祭、ジョゼフ・エストゥールネは、1962年に「クルテ神父の親族と友の会」(APAPEC)を設立したギヨームの親族の1人に請われて、世界中を駆け巡って同志を探し、あちこちの小教区で殉教者たちを顕彰するために尽力し、パチカンへの列聖嘆願団の副団長になりました。こうして、ギヨーム・クルテとその他の15人日本殉教者(このうち5人はギヨームの同伴者)は1981年にマニラで列福、1987年にはローマで列聖の運びとなり、祝日は9月28日に定められました。



聖ギヨーム・クルテ・センター

このセンターは、ヨゼフ・エストゥールネ神父(1993年没)の遺言のおかげで、モンペリエ教区によってセリニャン参事聖堂に隣接して設立されました。この小さな聖所は、常設の文書・写真展示室であり、また、古文書研究のための場所でもあります。

ウェブサイト: <http://www.saintguillaumecourtet.org>

Eメール: apapec@wanadoo.fr

